

# ONE-MAN REPO.

## 自身も学び、成長を続けながら 熱くおりひめジャパンを支える

日本女子代表コーチ

櫛田 亮介さん

木

ンダ、ホンダ熊本（かつて日本リーグに所属）でプレーしたあと、

ドイツに渡り、プロ選手して道が開けかけた矢先に左ヒザのじん帯や半月板すべてを断裂・損傷の大ケガ。手術、長いリハビリを経て、北陸電力で現役復帰を果たし、引退後、三重バイオレットアイリス監督に就任した櫛田亮介さん。

本誌の特集や久保弘毅さんの連載『VOICE OF Handball』、そして自身のSNSをとおして櫛田さんの数奇な人生、熱い思いは多くの人に浸透していることだろうが、今回は熊本世界選手権でありひめジャパンのコーチとして果たした役割などにスポットライトを当て、改めてその人となりに迫つてみることにする。

◇  
櫛田さんがおりひめジャパンのコーチに就任したのは、前回、2017年、ドイツでの世界選手権直前のこと。  
中部大4年時の半年足らずだが、世界をめざした先駆的な指導で、心技とともに櫛田さんを劇的に変えた、日本協会専務理事（当時）の蒲生晴明さん（中部大）、旧所属・ホンダの先輩で、櫛田さんの海外経験や女子選手の自立をうながす指導を評価していた日本協会強化本部長・田口隆さん（現在は専務理事兼任）からのアプローチがきっかけだった。

監督を務めていた三重は、当時、櫛田さん以外の指導者は不在。光榮で心躍るオファーにも、即断即決できたわけでは

なかつたが、チームの理解や周囲の後押しが得て、代表スタッフに。

自身も中に入る前はよくわからなかつたウルリク・キルケリー監督のめざすチーム像を具現化していくことを自分の役割と捉え、これまでとはまったく違う責任を負つての生活が始まった。

コーチとしてキルケリー監督と接してみると、OFでポストを起点にノーマークを作つていく戦術など、自分が求めてきたハンドボールと重なることが多い。試合ではエキセントリックな面も見せるが、普段は人間味、気配りにあふれ、ジョークを絶やさず、おちやめなところもあるキルケリー監督。

つねに「どう思う？」と意見を求めてくれるうえに、たとえ意見が合わなくてもあるキルケリー監督。

監督が理想とするプレーにつながるトレーニングを考案、実践したり、試合では戦術面の把握、分析や選手交代の管理をすることが櫛田さんの役目。

そこへ、昨春からアントニ・パレッキGKコーチが試合でベンチ入りすることになり、通訳としてベンチ入りしていた藤田愛さんに代わり、監督の言葉を瞬時に『変換』して伝えることも櫛田さんの役割となつた。

最大で1試合6分間あるタイムアウトでは、1分という尺の中で監督の考え方や戦い方を熟知している選手と経験の浅い選手双方に、効果的に監督の発する言葉

### 印象深いのは『戦いの前』

自身も就任当初から大きく成長して迎えた熊本世界選手権。

熊本はホンダ熊本の一員として日本リーグの3シーズン、約2年半生活した、思い出深い街で旧知の顔も多い。大きな

### — PROFILE —

くしだ・りょうすけ 1977年6月29日生まれ、42才。母親の実家・長野県で生まれ、父親の転勤で愛知県、石川県、奈良県などで生活。生駒中（奈良）までは野球少年だったが、同校の菅沼誠さん（大体大OB）のすすめなどで、一条高（奈良）からハンドボールの道へ。中部大、ホンダ、ホンダ熊本、そしてドイツ4部のピルナでプレー。ヒザの大ケガ後も北陸電力で活躍した。技術とともにプロセスで培った「自立」の大切さを説く伝道師として現在は日本女子代表コーチ、三重バイオレットアイリスのチームマネージャーを務める。家族はサミ夫人、イセくん（4才）と愛犬はな。

期待、注目に加え、懐かしい人たちの温かい声援も背にしての戦いだつた。

おりひめジャパンは昨年9月にOFの司令塔・横嶋彩(北國)、11月なかばにキャブニン原希美(三重)ら、核となる選手が負傷リタイア。

さすがのキルケリー監督も「落胆があ

りありだつた」(櫛田さん)と、戦力面では相当厳しい状況だつたが、それを乗り越え、24チーム制での大会となつて最高の10位に躍進した。

「メンバーを絞り込んで強化した方が『メンバーを絞り込んで強化した方が』という声もありましたが、監督は信念を持ち『30人ぐらいを1つのチームだと思ってる。いつたんメンバーから外れても、チームの一員に変わりはない』とずつと言つてきました。

また、組み合わせ決定時から『ホームでのビッグイベントの初戦に勝利するのは簡単ではない。まずは初戦のアルゼンチン戦に全力を』と徹底してきたことも大きかつたと感じます」と改めてキルケリー監督の周到さを実感した櫛田さん。そうした監督はじめスタッフのサポートと「準備を怠らず、めちゃめちゃがんばった選手たち全員の力が一つになつての成果」と、選手たちのがんばりにも最大級の賛辞を送つた。

熊本世界選手権で強く印象に残つているのは「細かいことがありすぎる」試合の局面よりも、11月30日のアルゼンチンとの開幕戦や、メインラウンド初戦、12月8日のモンテネグロ戦、試合開始前の

ことだとう。

9000人を超える大観衆が詰めかけた初戦のアルゼンチン戦。

「コートに入った瞬間、会場を見渡して、グッと来るものがありました。パトドーム熊本に来られたみなさんも驚かれたのではないでしょうか。

大観衆の中でのアップや国歌演奏は『自國開催ならではのプライスレスやな』という思いに包まれました」と櫛田さん。モンテネグロ戦直前のミーティングでは、キルケリー監督から「今日は(戦術や相手の分析を確認する)いつもとは違うから本当の戦いが始まるといふことを、とにかく勝つためにfocus(フォーカス、集中の意味)することの大しさを選手たちに伝えたい。櫛田の話しが、考え方でそれを伝えてくれ」というミッショントラスレられた。

監督からこうした任され方をしたのは初めて。「戸惑いもあつたが」「ハンドは1本のショートで2点取れるわけではない。ミスを嘆いて引きするのではなく、次にどうするかが大事。今に集中し、積み重ねていくことが勝利につながる」と熱く語りかけ、セブンを鼓舞した。

「メインラウンドに向け、メンタル面で『もう1回、スイッチを』とするのが世界基準なのか、日本人用なのはわかりませんが、感覚、ひらめきを大事にする監督らしいな、いいな、と思った瞬間でした」と櫛田さん。

今大会でキルケリー監督からの櫛田さ

んへの信頼も、ますます厚いものになつたことだろう。

櫛田さんの代表コーチとしての日本協会との契約は年度ごとに交わされることになつて、新年度もキルケリー監督との縊に変わりはあるまい。

## 次の大舞台に向けて

自国でのビッグイベントならではの感動にも包まれながら、充実した時間を過ごしたが、もちろんこれで満足している櫛田さんではない。

「新年度もありがたくお話をいただけたのならば」と前置きしたうえで「今回、終盤までリードを奪つていたスペインが銀メダル。その手応えと悔しさ胸に、東京ではメダルを取れる準備を。

オリンピックはメンバー14人での戦いですから、監督が納得して代表選手を選べるところまで、選手たちの心技体のコ

ニディションを整えていきたいですね」熊本に続く大舞台、東京オリンピックに向けた監督の意気込みだ。

東京オリンピックに向けて全力投球し、その後は梶原晃さんが監督として留守を預かってくれ、選手たちが地道な努力を重ねるホームチームに戻り、来年の地元・三重国体に向けて、最善を尽くす。それが櫛田さんが初詣で祈願した、2020年のビジョンだ。

熊本世界選手権後も代表選手が大きなケガを負う苦しい状況が続くが、そんな状況こそ、大きなケガからほい上がった櫛田さんの経験が役に立つはず。「監督はケガをした選手が戻つて来らるケース、東京に間に合わないケース両方を想定して準備するでしよう。

